

# おたまじゃくし

富田 惣七

おたまじゃくしが、岸のところへ頭をならべて集まっている。そしてたえずしっぽを振っている。このようにしっぽを振っているのは、歯の出来方のせいだという事ですが。つまり彼の歯は、食べものを喰いちぎったり、噛みくだいたりできず、細かいのが外側に並んでいるだけなので、ただ物をこすり取るのにしかな役だたない。そのために水に浮いている彼としては、しっぽを振って体に反動をつけないことには、うまくそのこすり取りができない。そういうはなしであります。水に浮いていて、手を使わずに、しかもこんな歯で物を喰べようとするには、これよりほかうまい方法はないでしょう。

それはさておいて、このおたまじゃくしには更に、足の出る様子についてもっと興味深い事があるという話をききました。

それは、まずうしろ足が出る。それも左右同時に出てくるのではなくて、右の方が先に出て、それから左の足が出てくる。前足の場合も同様、まず右が出て、それから左が出る。

うしろ足が前足より先に出てくるという事については、しっぽをふる運動と併せて考えてみれば、だんだん大きくなってきた体をふり動かすためには、もっと強力な反動源が必要。という事で、これは何となくこの考え方で片づくような気がいたします。しかし右の方が左より先に出るという事になると、これは皆目見当が付きません。

それで、大変向う見ずな假定なのですが、私なりの勝手な想像で、前述のあと足が先に出て前足があとに出る事に就いての考え方を、そのままこへも当てはめて考えてみますと、つまり“体を振り動かす”という物理的な要求に原因があるとしみますと——左右同時ではなくて、どちらかが早く出てくる状態の方が、たしかに体形がシンメトリーではないから、水にふわふわ浮いている者にとっては、始動が容易である——という事が考えられます。（しかし、假にそうだとしても、まだ左でなくて右の方が先に出るのはどういう理由によるのか、というむづかしい問題はそのまま残ります。）

しかし、とにもかくにも、事の次第は何であれ、これは大変意味の深い現象だと思えます。そしてこれをきっかけにして、次のような事が私の頭の中を去来します。

自然界は全体として、いつも総体的に、お互いに関係し合いながら、うまくバランスのとれた総合体としての営みをしていると思われまますから、足の出方にしろ、この奇妙な歯のでき方にしろ、彼と他との複合的關係の上で、彼が生長する条件としてそういう様に約束されているでしょう。そしてその約束のために、これ以上豪勢な食生活はゆるされないでしょう。

もし彼が、水に浮いていて、しかももっと何か特別な機関をそなえていて、手当り次第に何でも喰いあさる事ができるとしたら、彼の棲息する周辺は何らかの脅威を受けるでしょう。それはゆるされない。

だから生物は、自分の生態に都合がよいようにその機能を順応させていくけれども、決してそれは度を越えない。

つまり自然は、その生物の生存に都合のよいものを与えるけれども、同時に何時も総体を考慮しながらその生物にちゃんと規制を求めていく。

そこには自然界というものの、ふしぎで、偉大で、この上なく賢明な、すばらしい輪廻とでもいうべきものが働いているのだと思われます。食い、食はれしていながらどこかで全体にはうまく勘定が合っている。

生物は自らそうあろうとすると同時に、全体の中でのその者の位置によって、そのあるべき姿を決められるという、相対的な形成の原則とでもいうべきものによって、その機能を決定されていくのではないのでしょうか。

おたまじゃくしの、この不自由な歯の出来方や、水の上にふらふら浮いている状態が、必然と摂理のこの大きい自然界の、まことに巧みなバランスを見事に物語っているのではないかと思います。

さてこのように考えてきますと、近頃の人間のやる事は、ちと思いついてはいないのでしょうか。浅智恵で、おまっくらで、近視眼で。どこを見てもそのことばが眼につきます。やがて自然は、きっとその人間の思いあがりをお罰するでしょう。或いはもうその罰は初まっているのかも知れません。

この偉大な自然界の中で、人間という動物だけが例外でいられるというわけは絶対にありませんから。

ここまで書いて、ふと思いでラジオのスイッチを入れると、竹内均先生の文化講演の再放送があり、“地球と人間”という大変面白いお話の最中でした。

そのお話の終りのところで、寺田寅彦先生の随筆の中の言葉が紹介されました。それは“自然科学者に一番近い人間は誰だろうといろいろさがしてみたが、結局それは芸術家ではないだろうか”という言葉でした。

これは丁度、今私が向き合っている事に通じるので、偶然にしては余りにうまいところで、うまい言葉に出合ったものだと思います。

自然科学が追い求めているもの、追い求めたらまだ追い求めなければならないものがあつた。そこまで行ったら、まだ先があつた。どこまで行っても無限の変貌と未知数がつゞく、恐らくは永遠に到達できない謎として残るであろうもの。

人間が自分の心象で創りあげる、説明だけでは納得しようのない変転極りない深部の世界と。

寺田先生のこの言葉は、その暗示のように思われます。